魔術師
The Magician
まじディス
Magi-Dis
I
小説：USSKP
挿絵：みちいゆうき

短期休暇を取って自宅の掃除をしている所に突然、テーブルの上に魔法陣が現れ、そこから巨大な手が生えて来たのです。

胴体を捕らえられ、私は魔法陣へ引き込まれました。召喚道を滑り転げて、熱い液体に放り込まれて視界が真っ赤。上、とにかく上に。トビウオのように宙に飛び上がりました。

「うわっはぁ！」

びたんと床に落下します。咳き込んでいると、体から赤い粘液が滴りました。口の周りを舐めてみるとなかなか甘くて美味しい処女の血です。どうやら今まで血の池に沈んでいたみたい。

なんでこんな事態に。魔界のパワハラ的リストラ？　いや、そんなはずはありません。私は雑用、伽を行う使い魔として営業成績は上から数えた方が早いぐらいの、従順かつ柔軟で優秀な——

「ねこ」

そう、猫。……は？

声の方を見ると、裸のお嬢さんが私を指さしていました。

青白く輝く魔法陣の真ん中で踏み台のような低い椅子に腰を下ろし、水晶のドクロを抱いています。古い。私の二回り上の世代、ギロチンにまたがってぶいぶい大陸を走り回ったセンパイ達のファッションです。

改めて周りを見てみると、そこは時代遅れのラグジュアリーなサバトプレイスでした。広い部屋は赤い大理石材で出来ています。床には山羊や牛の首がごろごろ。壁は痛そうな鎖や茨が飾り付けられています。私が溺れた血の池は、部屋半分ほどの窪地で何かを大量に漬け込む槽のようです。

そして平地の中央には裸の少女。どこかぼんやりとした目で私を見ています。血まみれで蝙蝠の羽と耳がついている悪魔を見ても動じていない。

頭がおかしくなった生け贄さんでしょうか。まだ幼い顔つきで、お腹や腰のラインは直線的でひんそーですが、胸はぷっくりしていて女の子らしい。長い髪に大きな目をした、か弱くて上品そうなお嬢さんです。

とにかく、ここはどこなのかと魔界に問いただそうとしたところ、魔力障壁に妨害されてしまいました。これは困った。わずかに手に入った位置情報から推察すると、どうやら現世の欧州地区の模様。

それにしても居心地の悪い場所でした。どうも、ここの主とは気が合いそうにないようで……。大体こんな不正な手続きは本来刑罰ものです。お仕置きは役所に任せて、私は召喚のキャンセル処理を進めましょう。

ですが、周囲を見ても召喚主らしき姿は見えず。あそこに転がっている牛頭馬体の死体あたりかも。お客様は人間形態とは限りませんし、心臓発作なんかで力尽きていたり。だったら面倒が無くて嬉しいのですが——

「……ねこじゃないわ」

「ん？」

裸のお嬢さんが親指を立てて爪を噛んでいました。あんまりにもじっと見続けられると、何か返事をしなければいけない気分になります。

「……ええ、猫じゃないですよ」

私の答えに、お嬢さんは渋い顔をしてぱちんと指を弾きました。

「チェンジ」

「にゃんですとっ！」

瞬間、私の頭上に白円が開きました。神々しい光が差して、ラッパの音にハレルヤハレルヤ。腰がふわっと浮いて体が宙へと——っ！

「やめてお空はダメしんぢゃうっ！　悪魔！　私っ！　あくま！」

「……やっぱりねこじゃないくせに」

空の光が消えると同時に体が落下しました。再度、血の池まっしぐら。私はもう唖然呆然。顎まで血の池につかって握った拳で顔を拭います。
「あ、あなたが、私を召喚したんですか」
にわかに信じられませんが人は見た目によりません。夜店で外れくじを引いて無言で悔しがっているような女の子が強大な術者なんてことも――無くはないでしょうけど関わりたくない。悪魔を強制召喚した次ターンに天国へ送りかける速効型自作自演エクソシストを相手にして、命乞い以外の何をすればいいのでしょう。うわぁい。生まれて初めての大ぴんち。
「違うわ。私は貴女を召喚していない」
ですがお嬢さんは首を振って否定しました。つぶらな瞳を曇らせます。
「だって貴女はねこじゃない。でも丸めた手で顔を洗う仕草はそれっぽい。ひょっとして、あなたはねこ？」
「だから悪魔ですってば――」
話の繋がりが狂っています。召喚方法は型破り。趣味は合わない。呼ばれた意味もわからない。――これが私の召喚主なんでしょうか。
「ねこじゃないならお呼びでない。天理に従い魔は闇へ闇は空に――」
「うわぁぁあ！　止めてっ！　私こう見えてもすごいんです！」
すっと片手で天を指したお嬢さんに私は強引に割って入りました。
「猫だって捕まえるし家事全般、恋の相談から火事場泥棒まで！」
「あまりすごくないわ。それにねこが捕まえるのはネズミよ」
「ネズミだってなんだって！　とりあえずお茶でも飲んで落ち着い――」
辺りはウォッカでもラッパ飲みしないと落ち着けないサバト場でした。
「……そ、そうだ！　まずこの場のお掃除をします！」
「そう？　召喚はもう終わりにして、お願いしようかしら」
わ。話が通じた。しかもお嬢さん、ちょっと笑ってくれてます。
「貴女達はこういう場が好きなのでしょうけれど、私は苦手なのよ」
「はい？」
ほのぼのしていた私に、お嬢さんがまた不思議なことを言いました。
「仕方ないわね。文献に悪魔はこういう様式で呼べって載っていたし」
「いえあの、私も実情にそぐわないステレオタイプな場は苦手ですよ？」
「え？　貴女は異端者？　悪魔はこういうのが好きなんでしょう」
お嬢さんはどうしても私がおかしいのだと決めつけたいようですが、悪魔の武器は舌先三寸。会話さえ始めてしまえばこちらのものです。
「参考にされた文献は、どの時代のものですか」
「私が生まれてからずっと枕代わりに使ってきた大事な本。初版が出たのは三百年ぐらい前かしら」
その扱いは、余り大事にしているようには聞こえませんが。個人の深い趣味拘りはそれとなくスルーします。
「ずいぶん古いようですね。直接悪魔を掴み取る方式は今では邪法なんです。魔界の召喚パイロットポイントを通してレコードごとにログを残してパスを空けないと。それに、今の悪魔はそこまで血に拘りませんよ。様式もほら、私の服みたいにクラシカルな書斎風が主流でして」
着ている黒いベストにスカートを引っ張って示します。学生服のようですけれど、これが今の流行です。
「でも貴女はステレオタイプに血まみれよ」
「――血の池に入るまではツーピースで麝香の香りだったんです。それで、お話を伺った様子ですと、悪魔召喚を行うのは初めてですか？」
「いいえ、二回目」

お嬢さんは傍らの牛頭馬体の死体を指さしました。
「え。つまりその。えー、初回に訪れた悪魔との間にトラブルが……？」
——あれ、儀式のオブジェじゃなくてセンパイだったんですか。
「だって、ねこじゃないんだもの。還って貰ったわ。貴女にも還って貰おうと思ったけど、貴女は話が通じそうね」
「……そうですね！　お話が通じていると本当にいいんですけれどっ！」
センパイは体を置いてどこに還ったんでしょう。一番違いの紙一重。話続けないと。止まったらきっとセンパイの元ヘゴー・トウ・ヘヴンです。
「じ、じゃあお掃除しちゃいますね！　ところでこのお部屋は変わった内装ですが、普段は何にご利用されてるのですか？」
私が赤い岩壁の間を見回すと、お嬢さんは手を血の池に伸ばしました。
「見ればわかるでしょう。浴槽に洗い場。お風呂じゃない」
「——ああ、だから裸だったんですね」
そういう問題ではないとわかっていますが、適当に受け流しました。

お嬢さん曰く、整理された図書館がないのが問題のようなのです。
「この館の図書館が整理されてなくてね。なにも得られない知識の墓場。それで悪魔を司書にして図書館の整理をしようって決めたの」
「建設的なお考えですね」
モップがけをしながらお話に相づちをうちます。——全裸で。
お嬢さんはすでに紫色のワンピースを着ています。私一人が全裸で掃除。淫魔としてもこんなプレイをしたこと無いのに。血で汚れた服では掃除ができないから最善のスタイルを取っただけなのですが、なんでしょう。このもやもや感。理解は出来ても納得いかない合理的な不条理。

しかし都合の良いように曲解するのも悪魔の伝統芸能。ここは楽しい羞恥プレイだと思い込んでテンションを上げることにします。
「けどね、悪魔召喚方がわからない。術式を探そうとしても本は山積み。どうしようもないから愛用の魔導書の枕カバーを開封したわ」
「メインの使い道はもう枕なんですね」
おっと、テンション上げすぎて口がツッコんだ。慌てて手で口を塞ぎますが、お嬢さんは気にした風もなく続けます。
「七十九ページに悪魔召喚の挿絵がある。その絵の雰囲気を真似して、あとは私なりにアレンジをして召喚場を構成したの」
「——挿絵一枚手がかりにして、後はアレンジ？」
ルール無視の無茶苦茶なフォーマットとはいえ、センパイと私を引っこ抜く魔界道をほとんど自力で構築したというのなら、生半可な力や技で出来ることではありません。
「……ひょっとして、お嬢様は強大な術者なんでしょうか」
「そうでもないわ。失敗したもの。どうしてねこが呼べないのかしら」
か細いため息をつかれました。そこまで重要なんでしょうかねえ。猫。
「ねこの司書がいれば図書館の整理ができるのに。必要な知識を得られて正しい術を行使できたのに」
「あのう、お話の途中に失礼しますけれど」
私はモップを押しながらお嬢様の前についっと出てターンをしました。
「初めは、『必要な知識を得るために』司書が必要だ、ですよね」
「それが何か？」
「終わりには、『司書がないために』必要な知識を得られない。——原因と結果がループしていませんか」

付け加えれば猫は全く関係ないかと。
「……物事はウロボロスのように循環するものよ」
穿った言葉とは裏腹に、お嬢さんは本のページの間に立場のなさそうな顔を伏せました。あれあれ？　なんだか可愛らしい仕草じゃないですか。
このお嬢さん、強力な術者の様ですけれど色々と隙が見受けられます。随所で放たれる困った発言も年寄りの妄執より、若さ故の盲目に近い。ねこねこ騒ぐだけのお嬢さんならば愛らしいものです。それに強大な魔力の持ち主ならば、面倒な魂の契約をしなくてもいい。定期的に魔力供給をして頂くだけで魔界の収入源になります。
センパイのことさえ目をつぶれば理想的な主なのかも……いえいえ、今、次の瞬間にも私がセンパイ化するかもしれないのでした。今だって私には魔界に戻るための帰路がない。運命はお嬢さんに握られたままの大ぴんち継続中です。まずは、身の安全を確保しないと。
「ですが、適当な箇所で循環を断たないと問題は解決いたしませんね？」
「まあ、そうね」
「でしたらこの私めに一つの提案がございます。――先ず隗より始めよ。私を司書にして図書館の整理を始めたらいかがでしょう」
祓われる前に懐に入ればいいのです。魔界を通して正しい契約を結んでしまえば、私の生存権は保障されます。お嬢さんが魔界へアクセスさえしてくれたら、不正手続きが明らかになって逮捕――なんて期待もありますが。どっちに転んでも私は助かるわけです。
「このようなお掃除だけでなく本の整頓もこなして見せますよ」
モップを片手に胸を張るとぷるんと乳が弾みました。抑えつけるものが何もないから自由自在で気持ちいい。全裸楽しいです。

――おっと今はそれどころじゃない。頭を使いすぎたのか、なんだかおかしな気分になってきてます。
「本の検索、蔵書目録作り。お疲れの時にはお茶をだし、肩をもみ、足をもみ、手取り足取りねっちょりと。雑用の何をやらせても大絶賛の腕前で、お嬢様のご希望の用途にまさにジャストフィットかと思いますが！」
「……生き生きしてきたわね。働き者は好きだけれども騒々しいのは好かないのに。でも、なんにしても貴女はねこじゃないのよ」
「どちらかといえばタチですけれど、お嬢様のような可愛らしい方がお求めならばネコだって問題はありません！」
「たち？　意味がわからないわ」
「ええ！　私も何が何だかわからなくなってきています！」
口がすらすらと勝手に回って参りました。生命の危機感と全裸の開放感が興奮作用を招いているようです。それでも私の冷静な所はお嬢さんの不穏な様子に気がついています。満月の上半分を切り取った不審げな半目。うわぁ、やばいです！　こりゃ止まったら死ねます！
「ええ、賢明なる召喚士様には言うまでもなく、この世には星回りが存在します。今ここでお嬢様が私を呼び、私がお嬢様に呼ばれてしまった。この運命を最大限活用していこうと思いませんか？　私は思うなぁ！」
「わかったから静かにして。騒がしい」
「はいっ、かしこまりっ！」
お嬢さんの叱責に口を閉じました。しまった、調子に乗りすぎた。悪魔の武器を封じられて、まな板の鯉。ぱくぱくぴちぴちするしかありません。
「星回りに運命ね。そこまで言うなら試してみましょう」
お嬢さんが空の手を差しのばしますと、ふっとカードの山が現れます。

「タロットよ。シャッフル済み。好きなところから引いてみなさい」
促されるまま、一番上のカードを掴み取ります。
「トップカード。意味合いは、あなたを信頼します。強大な力には逆らわずに身を投げる傾向。でも服従をあからさまにアピールする狡猾さがあるわね。手綱を取られたらへいこらするけど、弱みを掴めばつけあがる」
「占いじゃなくて心理テストなんですか!?」
「いいえ、タロットも大事よ。見せなさい」
おっかなびっくり裏返すと、Ｎｏ・１のカードが表れました。
「マジシャンね。意味は知ってるのかしら司書志願さん？」
「意思やコミュニケーションをつかさどるカードです。創造力、出会い、決断――ほら、運命も私を雇用すべきと示しているじゃないですか」
悠然と答える私に、お嬢さんはいたずらっぽく人差し指を立てました。
「Ｏ・Ｋ。でもこちらからみたら逆位置ね。逆位置の意味は？」
「……え？」
不意打ちに驚く私に、お嬢さんは楽しそうに語ります。
「消極性、ペテン、契約に注意――さあ、消極的にペテンの契約を断るにはどうしたらいいの販売員さん」
「あ、あー……」
うわあ、この方やりにくい。ですが、こちらは交渉が本業。お嬢さんの手からカードを取ると、ぐるりと向きを変えて見せつけました。
「ほら、こうやって運命を変えろと命ずればいいんです。知識の墓とか血まみれの浴場とか、気にくわない物を片付けさせてください。――でも、私は片付け対象から除いてくださいね。最終的には必ずお嬢様のお気に召して見せますから」
負けちゃいないぞと図々しい作り笑いを見せますと、お嬢さんもわざと呆れたようなため息をつきました。
「よく言うわね。魔界の正規のパイロットポイントとやらはどこ？」
「え、じゃあ！」
全裸でガッツポーズを取る私にお嬢さんは淡々と続けます。
「――貴女の上司と直接話を付けるから。ああいいのよ、思い浮かべるだけで。貴女の頭を勝手に調べる」
「ふえ――うぁ！」
ざっと思考にかかるノイズ。一瞬で正常に戻りましたが、目からは涙、鼻から鼻血が垂れていました。
「片付いた。ここにいる間は魔界とは関係なく貴女を自由に扱っていいって。貴女も達者だけど上司もやり手ね。賃貸料をふっかけられたわ」
お嬢さんは人差し指と中指の二本をナイフのように立てると空を切りました。検索網、自動行動記録、鳥瞰視界。指が左右に振り下ろされる度に魔界から提供されている機能がぱちぱち断たれていきます。お嬢さんが指先をふっと銃口のように吹いた頃には、私は完全に魔界から孤立していました。強気の交渉は、背後に法と刑を司る組織があるからできるもの。今の私はただの脆弱な下級悪魔です。
「……ふぇえ、私、売り飛ばされました？　そんな、ひどい！」
「あくまで賃貸よ。雇用テストでもしましょうか。成績が悪くても賃貸料分の雑用をさせたら魔界に還すわよ」
うわぁ、良かった。さしあたって命の危険も遠のいたようです。
ほっと息をつく私を見て、お嬢さんはタロットを手の中に消し去ると、にっこり笑いました。

「古式ゆかしい頭の体操よ。魔界の力を借りずに、この場所から出ることなく夜が明けるまでに私の名前を当ててご覧なさい」

鬼や悪魔の名前を当てるクイズ話は古今東西、数多にあります。大体は他人から答えを聞くか、出題者が答えをうっかり漏らしたなんて結末です。だけどこの場に他者はなく、お嬢さんはうっかり何をしでかすかわからないディスコミュニケーター。なかなかの難問になりそうです。

「察せる程度にヒントは出してあげる。何でも良いから試して見たら？」

私の思案顔を見とって、お嬢さんは助け船を与えてくれました。猫とセンパイの件をのぞけば案外理知的で優しい人だったんですね。見目麗しく可愛らしいし。うーん、生き残りと契約報酬以外の理由でも頑張ってみたくなってきました。真剣にクイズを考えます。

回答に回数制限がないのは助かります。でも考えを煮詰めずに、いい加減に答えていたら評価は下がるのでしょう。正解を綺麗に答えて、お気に入りとして肌の触れあう距離にぴったり――あぐ、また鼻血が出てきた。

「……頭を探ったときの後遺症？　そんなにきつかったかしら？」

お嬢さんは鼻を押さえる私を不思議そうに見ました。

おかしいです。私。ここまで興奮しやすい性質じゃありません。全裸放置プレイがじわじわと効いているのでしょうか。いや、それよりもこの食えないお嬢さん、落ち着いて見てみるとふわっとしていて私の好みで……

「どうしたの？」

「ひゃい、いいえ、なんれも。ほりゃ――止まりました」

「ならいいけれど。クイズ中のお互いの呼び名を決めましょうか。真名は正式な契約をするまで教えて貰えないんでしょう」

「そういう規則は魔界も昔から変わっていませんねぇ」

「ならそうね。貴女の名前は――ねこを呼ぼうとしたら間違ってやってきたあくま、だから、略してねこで」

また来ましたよ例のアイツが。

「差し出がましいようですが普通名詞は名前にしない方が。誤謬が起きます。『猫を生け贄にして頂戴』なんて命令をしたら私一人で大惨事です」

「なるほど。じゃあ、あまり略さないで、ねこ悪魔」

「だから私、ネコじゃないんです。どちらかといえばタチで」

「たち悪魔？　なによそれ。全然わからないわよ」

お嬢さんは目をきょとんと見開きました。私には猫をつけることに、どれほどの意味があるかの方がよっぽどわかりません。

しかし、こういうところはウブなんですよね。やはり見た目に近い年齢なのでしょうか。うら若き年齢で強力な魔力を持つ術者といったら範囲が絞られます。記憶でたどれる有名人妖名はせいぜい数千件。ですが、条件分けしての検索作業は会話の片手間で出来るものではありません。本格的な名前当てはもう少しヒントを集めてからにしましょう。

「それなら、ねこあくまから根っこを取って、こあくま？　小さいし」

「小さいですか？この世界の一般女性ぐらいの体型だと思いますけど」

「いえ、存在が小さ目」

「くっ」

これだから強者ってのは歯に衣を着せないんだから。それでも私にとっては腹に一物ある輩より転がしやすい、好ましいタイプですけれど。

「悪魔は小物の方が取り扱いに便利です。コンパクトな魅力がお得です」

「ふうん。割とめげないのね。気に入ったわ」

「天然失礼発言じゃなくて故意だったんですか！」
驚愕の悲鳴を上げると、お嬢さんはいつの間にか手にした紙こよりで耳掃除をしていました。強者の上に腹に一物持ち。ますます敵にしたくない。
「いいでしょう。貴女は小悪魔。私はどうしようかしら。お嬢様って呼ばれ方は友人が思い浮かんで収まりが悪いのよね」
「お嬢様なお友達がいらっしゃるんですね」
私が尋ねると、お嬢さんは微笑みました。
「ええ。とびきりわがままなお嬢様がね」
お友達との仲の良さを伺える、ちょっと嫉妬しちゃうぐらいに良い笑顔でした。これもヒントでしょうか。でもお嬢様ってだけじゃあ、一般敬称なんだか通り名なんだか。とりあえずは心の端に留めておきましょう。
「そうね、私のことは魔術師とでも呼んで貰いましょうか」
「だから、普通名詞は避けた方がいいですって」
「職業魔法使いや種族魔法使いとは意識的に区別をしたわ。それに貴方と私で『魔術師を生け贄にしろ』なんて話をするの？」
「……そんな怖ろしいお話はあまりしたくはありません」
「決まりね。私のことは魔術師と呼びなさい」
お嬢さん――魔術師さんに向けて、私は両手を膝の前に当ててお辞儀をしました。
「わかりました、魔術師様。夜が明けるまで私は貴女のしもべです。この小悪魔になんなりとお申し付け下さい」
私の礼法に、魔術師さんも満足げに頷いてくれました。どうやらこの変わった魔術師さんは、しもべが全裸でもまったく構わないようです。

お掃除を終えてしまうと、やることがなくなってしまいました。
天窓を見ると月はまだ高い位置にあります。朝まで大分時間がありそうです。魔術師さんにいろいろ話を聞き出さないと。
「お茶でも淹れられればいいんですけど。お台所をお借りできます？」
「テストはこの場所の中だけよ。外に出たらダメ」
これも何かの意味があるヒントなのかもしれません。風呂場から出てはいけない理由。密室。人目のつかない離れ。――監禁？　ですが、私はすでに拘束されているようなもの。改めて監禁する理由はないでしょう。魔術師さんが監禁の対象だとしたら、方法がない。強固な檻でも魔法結界でも、魔術師さんならあっけなく突き破れるはずです。
その魔術師さんは台に腰をかけたまま、どこからか本を取り出して熱心に読まれていました。
「……本が湿気ません？」
「本周りには風精を働かせて乾かせているわ」
魔術師さんは首を左右に捻りました。ぱきぱきと派手な音がします。
「こってますねえ」
「デスクワーカーの宿命ね」
これはヒントでもなんでもなく、わかりきったことでした。魔術師さんは時々咳き込んだり、喘息のような呼吸をしていたりします。体が丈夫でないようですし、おそらく日頃は本の虫で運動と無縁なのでしょう。
「マッサージいたしましょうか。得意ですよ」
「お願いするわ」
背後に回ると、魔術師さんの細い首に手を当てました。少女らしい白くてきめ細かい肌をしています。素肌に触れるだけで気持ちよいのですが、

いつまでもうなじを撫で回しているわけにもいきません。服の上から肉付きの薄い肩を揉むと、魔術師さんはしっとりとした息を吐きました。
「ん――」
「どうです？　気持ちいいですか」
「すごくいい……でも、もうちょっと強くして」
「ど、どの辺でしょう」
「もう少し下……そう。あ――ううん、もう少しゆっくり。んっ」
「ここ、このぐらいで」
「あっ、上手、ね。いいわ――」
なんですかこの触れるバーチャル性交。
しつこいようですが私は今、全裸です。動く度に大気の流れを素肌に感じて、微妙な刺激と開放感を受け続けています。そんな羞恥と放置のコンビネーションプレイ中だっていうのに、華奢な体に触る度に色っぽい声を出されたらいろいろとそのあの。私だって発情期を迎えているお年頃の女の子ですし淫魔を半ば趣味でやってるぐらいには性交が好きでちょっとここここ、こまるこここあーっ！
「痛いっ」
いけない。つい力任せに握ってしまいました。
「すいませんっ」
「気をつけて。あまり他人から触られたりしないから敏感なのよ」
「他人から触られ慣れていた方が体は敏感になりませんか」
「そうなの？　医学や生化学は余り詳しくないの。自分の体のつくりも良くわからないから病気も治せない――あなたは得意？」
「片寄った医術でしたら。私は淫魔もやってますから、そちら周辺に関しては事細やかにご説明できますが」
「……私の役には立ちそうにないわね」
果たしてそうでしょうか？
私は湧いた唾をごくりと飲み込んで、魔術師さんの耳元で囁きます。
「ねえ魔術師様。先ほど自ら乙女の生け贄役を演じられてましたけれど、性交の経験はおありでないのですね」
「ええ。興味もないし体も持ちそうにないし。こんな質問は名前当てのヒントにはならないと思うけれど」
「名前当てでは私の頭脳を判定して下さるんでしょう。ですけれど、私は他にも得意な事があります。淫魔として――性の戯れと神秘について。小悪魔の力をお試しになられませんか？」
背中越しの私の誘いに、魔術師さんはゆっくりと振り向きました。
己が欲望のために悪魔を召喚してしまう人達なんですから、召喚士は意思も我も強いと相場が決まっています。ですが、魔術師さんの目からは強さや鋭さを感じさせません。光の弱い、静かな瞳の持ち主でした。とろりと煮込んだすみれのジャムのようにねっとり甘そうな色をしています。
この方のズレた常識やひねくれた会話には悩まされますが、ゆったりと落ち着いた雰囲気は好きです。身も心も使い魔な私には、魔術師さんの何事にも動じない様子には強く惹かれてしまうのです。
そんな器の大きさとは裏腹の幼い外見。甘いのは瞳だけではないでしょう。ミルクを流したような滑らかな肌。力を入れると砕けそうなビスケットの骨格。艶やかな飴細工の髪。紫色のヴェールを包み紙のように剥がしてしまえば、先ほどまで露わにしていたお菓子の体がむき出しになるのです。どこに口付けたって美味しいんだろうなあ、と思いながら魔術師さん

の前に回って耳元に囁きます。
「――魔や邪との交流が盛んなお方には、乙女の印は災厄を引き寄せる害悪にしかなりません。きりの良い時に喪失した方が良いのでは」
「でも、痛くて辛いんでしょう。無理にしたくもないわ」
「それが辛いことでしたら、なぜ淫魔という役職があるのでしょうか」
私は魔術師さんの頬に――内心では退魔術を喰らわないかとびくびくしながら――指先で触れました。魔術師さんの瞼がわずかに下ろされました。すみれジャムの瞳に蔭りが生まれて濃厚な色合いに煮詰まります。
「そんな誘いをして貴女になんの得があるの」
疑問を口にした。疑問の余地がある。緩んで来ているのです。魔術師さんの柔らかそうな唇に目を落とせば、わずかに開かれた口から、喘息とは違うリズムでか細い呼吸を抑えているのが伺えました。
緊張しています。追い込んでいる。
交渉相手を堕とす寸前の興奮は、絶頂の前触れとよく似ています。求められるままに終わらせたい、このまま焦れて遊んでいたい。慌てての乱暴は私のやり方ではありません。相手と共に官能を高めて味わうのです。
私は柔らかく陥落を促す言葉を続けます。
「私は全てを魔術師様に見て頂きたいんです。――魔術師様程の方なら、いつだって私の悪行を成敗できるでしょう？　嫌になったらお止めになってくだされば」
「他人から触られるのは嫌なのよ」
「でも、私の肩もみは気に入って頂けましたようで」
「そんなの。……肩もみとは違うんでしょう？」
また。崩したくなるように脆くて危なげな疑問系。
知識人とは業が深い。知らない事をそのままにしてはいられない。世の全てが知りたくてたまらない。――そして悪魔はそれに応えるもの。
「どのように違うのかはご存じないのでしょう」
魔術師さんの視線が床に落ちます。ミルクの頬には薔薇の花弁を浮かべて春の色。どこまでも甘やかにほどける魔術師さんの心が求めているものを、私はそっと掬って差し出します。
「お試ししませんか」
もう一度誘いの言葉をかけて、魔術師さんの頬を両手で挟みました。
「口づけはご存じでしょうか」
「――唇が触れあうだけでしょう」
魔術師さんは不安げな半目になりながらも強がろうとしていました。嬉しくなってしまいます。私も悪魔。花に誘われる蝶のように、乙女に引き寄せられる。淫魔としてお仕えする方々は性に貪欲な方ばかり。魅力的な乙女の初めての行為を堪能できるなんて僥倖は滅多にありません。
魔術師さんの瞼を撫でて目を閉じて頂くと、そっと唇を重ねました。うっすら香草の香りがする、柔らかくて滑らかな唇でした。
長く激しい口接をするつもりはありませんが、すぐに顔を離すつもりもありません。ただ触れるだけでは、魔術師さんに『たいしたことなかったわ』なんて冷ややかな顔をされてしまうに決まっているからです。唇を唇で擦り合わせてから横にずらし、口脇に押しつけるようなキスをすると、頬をなぞって耳たぶに口付けました。髪をかきあげて耳の後ろにも。
魔術師さんは小さく震えて呻きました。そして細いため息。唇を肌から離し、抱きしめて頭を撫でていると、体からだんだんと力が抜けていく様がわかりました。感じているのでしょう。淡くささやかなものかもしれま

せんが、乙女の体に官能を呼び起こすことには成功したようです。
「……どうでしょう？」
「肩もみとは違う……そういえば貴女ずっと裸のままだったのね」
私の肩にぼんやりと顔を当てていた魔術師さんが呟きました。ちょっと照れたように爪で私の鎖骨を引っ掻いてきます。当人は誘っているつもりはないのでしょうが、無意識な誘惑の仕草にぞくぞくします。
魔術師さんの胸の上に手を当てて止めました。様子を伺うと、恥ずかしそうに伏せ目になるだけです。安心して柔らかな胸を握りました。
魔術師さんは下着を着けていませんでした。薄い布地の下の造形は布越しにしっかり伝わります。細い体と比べたら大きい乳房でした。良く育った大人の女性の胸とは違います。みずみずしい弾力の中にも、芯には硬い蕾が残っている開きかけの花です。花の中心の真珠の蕾、乳首を摘んで優しく揉むと、魔術師さんは目をつぶって苦しそうにぎゅっと口を噛み締めました。声を出したくはないのでしょう。一つ一つの反応が純真で可愛らしい。こんな風に乙女が性に蕩ける様をゆっくりと見ていきたいので、魔術師さんの態度が変わるまで見守りながら無言で胸を触り続けました。
「ちょっと止めて」
やがて命じられて、手を止めました。熱っぽくかすれた声でしたので、中止というわけでもなさそうです。
「こういうことは、いつまで続けるものなの？」
「お望みの限り。お望みのように」
「望むも何も、私は……知らないの。こういうこと」
魔術師さんは上気した頬を口惜しそうに膨らませました。
「貴女に任せるから。痛くも苦しくもなく、一般的なやり方で一通りやって欲しいのだけど」
「――はい」
わき上がる喜びに私は拳を握りしめて答えました。
「じゃあ、もう一度口づけから始めましょう」
唇を合わせて舌を差し込むと、魔術師さんは驚いた顔をして口を閉ざしてしまいました。いけない、勇み足だったようです。舌は唇を舐める程度の動きに抑えて、魔術師さんの衣服を脱がせます。ワンピースの肩を外せば、服はするりと床に落ちました。現れるのは初めてお会いしたときに拝見した、生け贄として申し分ない裸体。抱きしめて次の体勢に移行しようとして、問題点に気がつきました。
お風呂場は初めての性交場所としてはさほど一般的ではありません。慎ましやかな乙女の情感を優しく引き出すには絡み合う床が大事なのに、この床は冷たい岩石板。か弱い魔術師さんを横たえられません。
「すみませんが私の言うとおりの格好になってもらえますか？」
魔術師さんに台から立って頂き、私が代わりに腰をかけました。両手を広げて誘います。
「木に抱きつくような形で私の上に座ってください」
「え、ええと」
魔術師さんはためらいながら近づくと、私の上に乗ってきました。
「――こう？」
「はい、そのまま私の首に手を回してくださいね」
魔術師さんの腕力は頼りないものですし、私も筋肉自慢の悪魔ではありません。女の細腕よりはましな程度。落とさないように気をつけて魔術師さんの背に手を回します。

脇や背中、首筋などを唇や手のひらで撫でると魔術師さんはくすぐったがりました。気持ちよさとこそばゆさの区別ができるほど性感が育っていないようです。幼子でも感じるような性の根深い箇所をさすりながら、身を託して交わる悦びを教えてゆくのが良いのでしょう。

そう思って、もう一度体を抱き寄せますと、魔術師さんはくたりと力を抜いて寄りかかってきました。

「人肌って気持ちいいわ。それとも貴女の体が特別にいいのかしら」

ずいぶんと心を開いてくれています。私の上司の首根っこを押さえているのですから、いざとなったらどうにでもできるといったセーフティが効いて開放的な気持ちになっているのかもしれません。魔術師さんの頬を撫でて、肌に私の手を馴染ませてから胸を触りました。揉みながら指の付け根で乳首を転がします。痛がらせないよう力加減と速度を調節し、胸の先端が硬くなった所で一度手を離して様子を確認しました。白い膨らみの上に淡い桜色の真珠が綺麗な形に立ち上がっています。

魔術師さんも顔を下げて同じ場所を見ていました。ふっと私の視線に気がつくと頬を赤らめてそっぽを向きました。

「……あまりみないで」

可愛らしいなぁと相好を崩して額と頬に口付けました。首筋、鎖骨。背中を丸めて懐に潜り込んで乳房に顔を埋めたら、頭の後ろを捕まれました。魔術師さんは私の蝙蝠の耳を指で摘んで弄ります。落ち着く心地よい愛撫です。しばらくこうしていたいと思いましたが、火照りかけた魔術師さんに熱を絶やしてはいけません。乳首に口付けると魔術師さんのお腹がぴくりと震えました。舌先で真珠の天辺をいい子いい子と撫でてあげると、私の頭を掴んでいた魔術師さんの指に力が入りました。それでも声を出そうとはしない。「出してもいいんですよ」なんて声をかけても、はいそうですかと喘ぎ出したりはしないでしょう。女性の恥じらいや強がりは儚く愛おしいもの。黙って味わわせて頂きます。

両方の乳首を手と口を交互に変えて愛撫し続けると、喉の奥で苦しそうに息を詰まらせる音が漏れ聞こえて来ました。体が丈夫な方ではないのですから気をつけないと。顔を見ると、口元に手を当てて目を潤ませていました。魔術師さんの手を取って口付けて、もう大丈夫かなと、唇を重ねて舌を入れます。思った通り、今度は拒絶されませんでした。舌と舌を絡めて軽く吸って離れます。熱いため息と銀の糸が私達の間に伝いました。

魔術師さんの股の間に手を差し込みます。ぬるりと蜜が溜まっているその先端の柔らかい肉をゆっくりさすりました。

「ご自分でこういうことをされたことはありますか？」

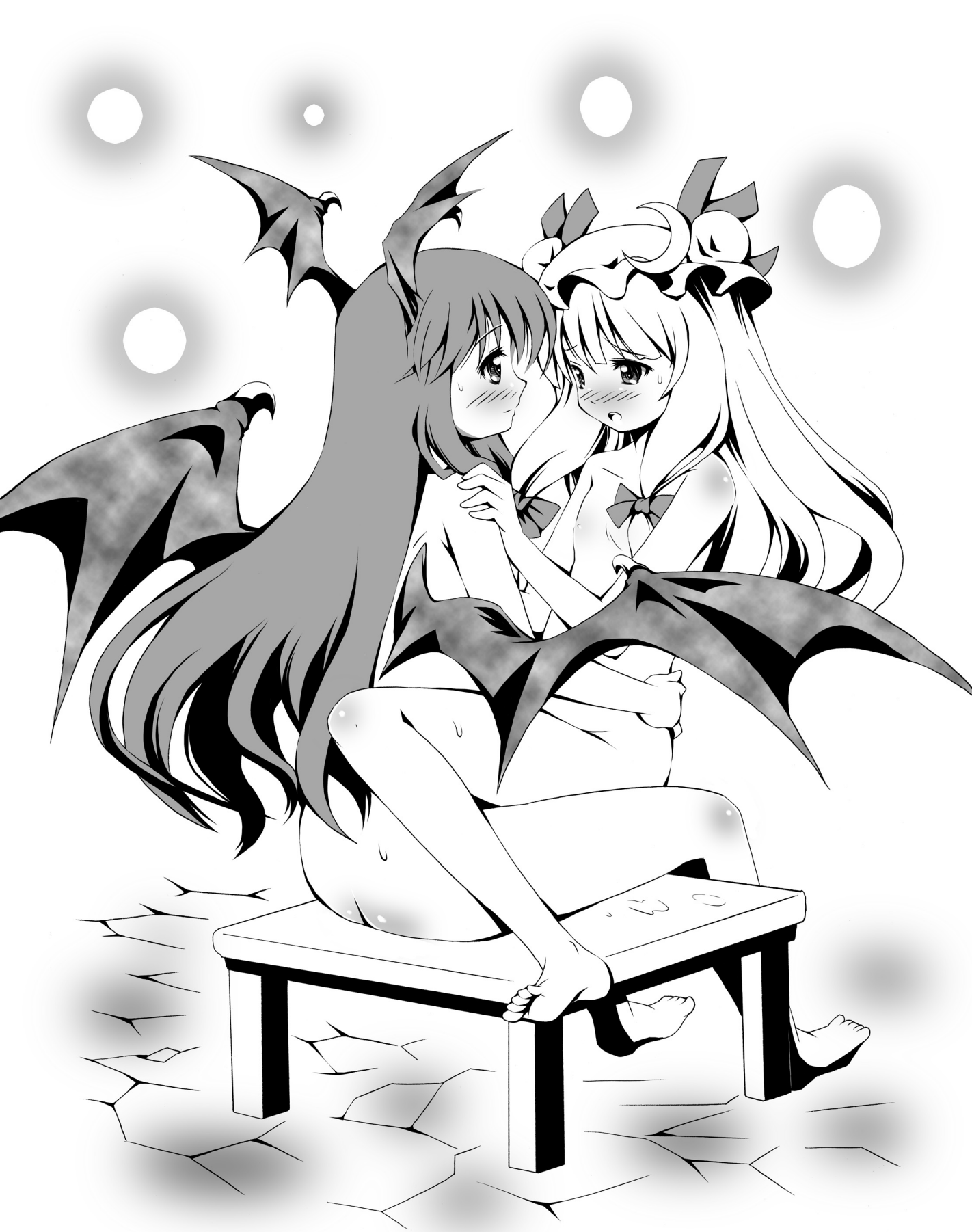
「こういうこと……って？」

不思議そうに眼を細める魔術師さんに静かに淫核を押し込むと、短い悲鳴を上げて体を反らせました。空いた手で背中を引き寄せて、淫核をそのままこね続けます。

「な、ないわ、こんなこと……」

「始めはちょっと怖いかも知れませんが、私に掴まっていて下さい」

蜜を絡めながら淫核をゆっくり弄り続けると、魔術師さんは泣きそうに顔を歪め始めました。怯えたような目もとや、くぐもった嗚咽を漏らす唇に何度も口付けます。そのうち魔術師さんの方から私の唇を求めてきました。苦し紛れらしく、少し乱暴で痛いぐらいのキスです。ふぅ、ふぅと切なげに鳴る熱い吐息を聞いていると何もかもが許せてしまいます。硬くなってきた淫核の包皮を手探りで剥き、露わになった敏感な粘膜に触れま



す。突起の頭を軽く抑えて左右に動かし続けると、魔術師さんは目をぎゅっとつぶって子猫のような声を上げだしました。もう少し。私は体を下に沈め、目前の尖った乳首を甘噛みしました。魔術師さんが泣きながらがたがた震え出します。支えるのがちょっと辛くなりますが、今はこのまま頑張るしかありません。淫核を捏ねるリズムと乳首を吸うリズムをわかりやすく同期させて快感のタイミングを伝えます。魔術師さんが私の羽根を掴んでちぎりそうに爪を立ててました。痛い、でも気持ちいい。もっと、もう少し――乳首を舌で弾いたときに、魔術師さんは跳ね上がりました。達したのでしょう。体の震えが収まるまで魔術師さんの淫核を撫で続けると、やがてぐにゃりと力が抜けました。

「いかがでした？」

「――すごいわ」

魔術師さんは、信じられないといった風に呆然とした表情で息を弾ませています。体に不調を起こさずに快楽を味わって頂けたようです。これだけ感じて頂けたのならこの先もスムーズに進むでしょう。

「これが性の快楽ですが、こちらに男性器を入れなければ乙女のままです」

蜜のぬめりの奥にある入り口に指を当てました。甘い愛撫にほぐれた体は性を迎え入れようと柔らかく開いています。中指をゆっくり沈めると、軽い抵抗を感じさせながらもぬめった膣穴に少しずつ入っていきました。

「痛かったら教えて下さいね」

「大丈夫よ。だけど男性器ってどうするの？」

「作れますよ。ほら」

中から指を抜くと自分の股の間に手を当てて、硬く立ち上がった男性器を形成しました。魔術師さんは興味深そうに見てきました。

「大きくない？」

「一般的にはこれぐらいです。今回は小さくして入れますけど、様子を見て大きくしますから」

指と変わらないサイズにまで男性器を縮めると、魔術師さんの腰を持って性器へあてがいました。ゆっくり互いの腰を近づけて押してゆくと、内側にくわえ込まれて行きました。小さな肉槍が熱した粘土のような肉に包まれて、じりじり熱い快感が背中を這い上がります。

「これで処女では無くなったのよね？」

「一応は……です、けど。肉体的にはまだ――処女膜が残っていると思います。男性器が、小さめですから。もう少し大きくして広げます」

拷問のような快感に堪えながら説明をしました。

「中に精液を注ぐところまでするつもりですが、よろしいですか」

よろしくないとか言われると非常に厳しい所でしたが、恥ずかしそうに頷いてくれました。魔術師さんの腰を固定して、上下に持ち上げるようにゆっくりと動きます。徐々に男性器を大きくしていくと、魔術師さんは眉をひそめて自分のお腹を見下ろしました。

「中で……大きくなってる」

「ん、痛くは――ないですよね？」

「うん――硬いのが少しずつ中で広がって、あ、すごい、これ、動いてる」

お腹を押さえて、切なそうにため息をつかれました。色っぽい吐息に惹かれるように口づけを求めます。くちゃくちゃと唇と舌を食べながら、腰を動かして侵入と退却を繰り返します。肉槍を太らせていくと周囲から柔らかく絞られてきたので、太さを留めました。長さだけを伸ばして奥へ進

めていきます。やがて、槍頭が抑えつけられるような感触がしました。
「……奥まで、入り、ました、よっ」
「来てる、わ。熱いのが当たって……すごい。貴女も気持ちよさそうね」
「……ものすごく、気持ち、い……もう耐えられないぐらいですっ」
壊れるほど強く腰を打ち付けたい気持ちを抑えて泣き言を言うと、魔術師さんは優しく微笑んでくれました。
「耐えないで。貴女が感じてくれないと経験したことにならないじゃない」
「あぁ……では、……お言葉に甘えてっ！」
魔術師さんが苦しそうな顔をするまで肉槍の柄の太さを拡張しました。槍頭で子宮を持ち上げて体内に押し込むと、前後左右にねじ回すように動きます。子宮の口を攻め続けていると、魔術師さんの反応が変わってきました。私から滲み出している淫液が回ってきたのでしょう。私の動きに合わせて、焦れたように腰をくねらせます。先ほどまではぎちぎちだった中の道も、魔術師さんの愛液と膣肉の収縮とで少し緩みが出てきました。
腰を引いて打ち上げると、ぷちゅっと湿った音がして魔術師さんが反り返り、甘い悲鳴を上げます。そのまま幾度も突き上げると、泣きながら胸を突き出して反ったままになりました。目の前でふるふる震える乳房にしゃぶり付きました。乳首を吸いながら腰を打ち込んでいると、悲鳴が甲高く断続的になってきました。
絶頂を合わせようと、私は下半身に意識を集中します。ぐにゃぐにゃしているのにきつく締め付ける肉。打ち合って擦れる肌。沸き出して漏れる体液。来る、もう――
「んっぅ――！」

互いに断末魔のような短い声を上げて達しました。私の奥から放たれた精が、男性器の精道を上がって魔術師さんの子宮へと注がれています。中までしっかり染みこむようにと先端を子宮にぐいぐい押しつけながら全てを出し尽くすと、全身に倦怠感が襲ってきました。このまま崩れて眠りたい。けれども私の腕の中では可愛らしい方がぐたりとしている。放り出すわけにはいきません。腰と背筋にしゃんと気合いを入れなおして、魔術師さんを抱き直しました。

気怠い時間は、目を開けた魔術師さんの一言で消え去りました。
「――月が消えたけれど、もうすぐ朝じゃないの？」
うわあっ、睦み合いに夢中でクイズのことを忘れてた！
窓をみると、確かに月はもう見えません。闇の色もうっすらと明るさを帯びてきて、朝の到来を示していました。
「気がつかない間に時間が経っちゃったのね……ちょっと怖いわ」
魔術師さんは濡れタオルで体を拭っています。その役目もしてあげたかった――なんて煩悩に浸っている場合ではありませんでした。万が一、性交の腕前を評価されたとしても、クイズもろくすっぽ出来ない性欲ばかりの貧弱な頭の持ち主と認識をされては――今のこの有様じゃあ全く否定は出来ないんですけれど、それでも屈辱です。
どうしよう、と魔術師さんを見ていると、魔術師さんは私が脱がせた服を着て、手の中に帽子を生みだしてかぶりました。
「そろそろクイズを締め切りたいけれど。何か質問は？」
私は魔術師さんの帽子についた飾りを見ながら尋ねました。
「……月はお好きですか？」

「面白い質問ね。好きよ。赤い月は特に身近だし。他に質問はないの？」
「ええ」
「じゃあ答えて。私の名前は何かしら」
「あなたは――」
魔術師さんの帽子には三日月のエンブレムがついていました。
私は今まで得た情報を纏め上げます。場所は欧州。処女の血風呂。悪趣味な貴族の内装。強大な魔術師。幼い外見と幼稚性。そして赤い月――。
私が記憶している有名人の特徴と大部分が一致するものが一件。その名を読み上げようと私は口を開きました。
「――古くからこの地に住む力ある貴族。人間がもっとも厭う敵。永遠に赤い幼き月。レミ――」
「ぱちぇー。長っ風呂過ぎていい加減死んでない？」
――りゃ？
バタっと扉を押し開けて、お風呂場に大きな蝙蝠羽の生えた女の子が入ってきました。目を点にする私の方を見て、女の子は首を傾げます。
「あれ、なんか増えてる？　ねこはどうしたの？」
「面白いところだったのに。いつも台無しにしてくれるわねレミィ」
「おいおい、人んちの風呂を占拠してその言いぐさはないだろうに」
「だって、血で汚れるからって他の部屋を貸してくれなかったじゃない」
「自分の部屋でやれ」
「私の部屋が血で汚れるじゃない」
私は二人を呆然と見ていました。魔術師さんと語らう蝙蝠羽の子の口には小さな牙。ああ、あちらが赤い月のお嬢様で……。
「それはそうと間違えたわね。当たらずとも遠からず。それでも豪快にやってくれた。こう見えてもレミィは私とかけ離れた武闘派なのよ。そこまでは知らなかった？」
魔術師さんはこちらを向いて楽しそうに笑いました。
「判定をしてあげましょうか？　技能は七十点。問題解決への情熱が五点よ。何でも小器用にこなせるから、身心を投げ打って働くことがないんでしょう」
「う……」
図星を突かれてしまって何も言い返せません。
「具体的な質問をしなかったわ。『貴女の名前はなんですか？』なんて馬鹿らしい事を聞けば良かったのに。私の出身地、言語圏、名前の由来なんてものも幾らでも聞けたはずなのに、頭の中だけで片付けようとした」
「なんだか知らないけど、そいつもパチェの同類ってことかい。この館も一層の偏りが増していいことね。そのうち傾くんじゃないの」
赤月のお嬢様はニヤニヤと笑いました。
「館が傾く前に本の整理をしないといけない。レミィ。メイドに言ってこの子の服を一着仕立てて頂戴。小悪魔。すぐに仕事を始めてもらうわよ」
「え？」
「頭の片付けができる子は嫌いじゃない。後で聞かせてもらうわ」
そういって、私のことを手にした書物で指し示します。
「――貴女の真のお名前をね」